

# 高校における特別支援教育の役割に関する一考察

—アスペルガー症候群の一症例を通して—

木谷 秀勝

A Study of the Role of Special Support Education at High School  
- A Case study for asperger syndrome

KIYA Hidekatsu

(Received January 15,2008)

キーワード：アスペルガー症候群、特別支援教育、高校での特別支援教育

## 1. 目的

平成 19 年度から正式にスタートしている特別支援教育の重要性が認識されたのは、平成 15 年に文部科学省が報告した小・中学校の通常学級に在籍する児童・生徒の中の、6.8% が何らかの支援を要するという報告内容とその数字の高さによるものである。その 6.8% の数字の正確さへの議論は余地を残すところであるが、最低でも通常学級に支援を必要とするというよりも、支援を求めている児童・生徒の声が上がっていることに率直に耳を傾ける時代となっていることだけは確かである。

ところが、こうした義務教育における特別支援教育の重要性は強調されるようになった一方で、高校における特別支援教育体制は遅々として進んでいないことは大きな問題として考えなければならない。実際に、高校の関係者が「きちんとした試験を受けて合格しており、特別支援を必要とする生徒は一人もいない」と豪語すると聞くと、それはまったく根拠のない一方的な視点に過ぎないはずである。

昨今の軽度発達障害に関する研究の流れからみても、学童期・思春期にこれだけの数字があがっていることを素直に考えても、当然高校生の世代にも同じ程度の生徒達がいることは隠しようのないことである。また、医療現場においては、成人後に軽度発達障害による受診者が増加している事実も忘れてはならない(衣笠, 2007)。

また、筆者が県内外で実践している特別支援教育では、小学校や中学校から継続的に支援を行っている事例では、その支援で安定した能力が、本当に本人や周囲の関係者に目に見える形での成果として現れるのは、高校の時代であると感じている。ただし、これ以降の「高校」が示す対象としては、一般の高等学校(全日制、定時制、通信制)と合わせて特別支援学校(地域によっては、養護学校高等部及び高等養護)を対象とする。

そして、もっとも大切なことは、この青年期という発達段階での姿を見ることにより、本当の意味で成長した姿が確認でき、同時に将来への問題点も明確になるはずである。

## 2. 高校における特別支援教育の問題点

そこで、次の問題点として、これまで高校において特別支援教育が効果的・組織的に進んでいない理由を考えてみたい。そこには、次に示す3つの問題があることがわかる。

### (1) 中学校における進路指導の問題

県内での軽度発達障害児への進路指導をみていると、どうしても従来からの知的障害児への進路指導が基準となっており、その流れの中で高校への進学よりも養護学校の高等部への進学で安易に妥協している場合が多い。合わせて、こうした進路指導の方向性は、本人や家族にとっても中学校での学習に対する動機づけの低下も招いており、こうした教育的な配慮の無さに起因した学力低下を、本人の学力面の問題として簡単に理解しがちな中学校も多い。さらに問題となるのは、こうした安易な指導方針しか立てられない教師とその指導方法が、あたかも的確な教育内容として重んじられ、軽度発達障害児の特性を理解して、高校進学を視野に入れた指導を取り組もうとする家族や若い教師を批判的に見る教師も存在している。

### (2) 受験という最初のハードル

確かに高校入学には受験という大きなハードルが待ち受けている。より正確にいうならば、中学校での習熟度テストや定期テストの標準偏差値だけにより合格するための事前調整がもつ意味は大きい。体験した事例では、2つのパターンが高校進学後に問題となることがある。第一に、単純に偏差値が低いということで、不器用さが顕著な学習障害児が、もっとも器用さを要する工業高校を受験して、合格しても中退するパターンである。もう一つは、理想が高い軽度発達障害の場合には、高いレベルの高校を希望することがあり、周囲の説得でレベルを下げた場合、入学後に高校で生じるトラブルの原因（本人の問題である場合）を希望した高校を受験させてもらえなかったせいだと一方的に問題点を外在化してしまう場合である。

### (3) 「軽度発達障害はいない」という体質

先に述べたように、高校の関係者には「軽度発達障害はいない」という認識が強い。学習にしても、できない教科については、単純に本人の努力が足りないからだと考える傾向があり、また、勉強方法そのものも「こう高校生なんだから」と本人に任せっぱなしの場合も多い。その結果として、中退となった原因に軽度発達障害があることを前提とした視点がない。

さらに、高校の段階で見られる不登校、うつ病、対人恐怖、強迫性障害等の精神的な問題の背景として、発達障害に起因した二次障害としての理解が乏しい状態であるために、カウンセリング的な側面から理解して、初期対応が間違っていたり、気持ちをしっかりともてば良くなると根拠のない対応を行っている場合もある。

### (4) 青年期の軽度発達障害のマニュアルの欠如

軽度発達障害や特別支援教育に関する資料を散見しても、高校時代の軽度発達障害児の特徴とその対応について明確に記述されている専門書はまだまだ乏しい。実際に、ADH

Dの特徴として、小学校の低学年で顕著となる多動の問題は、高校では学習における不注意さが問題となる一方で、元気で明るい性格として肯定的に評価される場合も多い。さらに、自尊心の低下がある場合には、うつ状態が顕著となることもあり、こうした発達段階に特有な状態像を正しく理解できないために、早期対応ができないことは多い。

### 3. 高校時代のアスペルガー症候群がもつ自己意識の問題点

その一方で大切な問題として、この高校生の発達段階にあるアスペルガー症候群（以下AS）の自己意識に関する問題点への理解を明確にして、その可能性のうえに高校での支援体制を検討しなければ、特別支援教育自体が効果のないもの、教師だけの一方的な満足に終わってしまう可能性がある。

その自己意識に関する問題点として筆者は次の3点が重要であると考えている。

#### （1）現実的な自己評価の揺らぎ

高校は入試からスタートして、原則的には成績の善し悪しで評価されやすい。また、最近の進学校の状況をみていると、一年生の夏休みの段階で、希望する大学の調査をさせるなどと、3年間じっくりと自分自身の成長を見つめる余裕がない現状である。また、ASは得意・苦手教科が極端になりやすく、それでいて、教師側からASの特性に応じた学習支援を積極的に行ってもらえることはほとんどないために、どうしても思ったように成績が上らず、それが大きなストレスとなり、社会的不適応状態まで至った事例も体験している。

#### （2）他者からの評価（客観性）の受容

この特徴は、非行化が進んだ一部の中学校でも見られる現象であるが、高校では先に述べたように特別支援が必要な対象はいないといった教師の先入観や荒れている周囲の生徒による不必要なちょっかいやいじめで、結果的にAS自身が不安定になり、でも周囲の生徒はうまく立ち回るために、一方的に非難され、一人不登校や退学となる可能性も高い。それだけに、高校の選択についても、こうした周囲の教師や生徒の安定しているかどうかにより、AS自身が周囲からの適切な評価を受けることができれば問題ないが、その逆になる可能性がある場合には、自己評価の急速な低下を防ぐための対策をきちんと準備しておく必要がある。

#### （3）自我同一性の葛藤

中学校までは、幼少時期からの知り合いも多く、常に周囲にはASが困ったときにその「その子を見れば大丈夫」というモデルが存在している。同時に、自分自身の理想のモデルも同様である。ところが、個性化が進む高校時代では、通学範囲もはるかに拡大され、まったく初めての人間関係からスタートしなければならないことを考えると、自分らしさとしての自我同一性を誰をモデルとすればよいか、悩む場合が多い。

#### （4）進学・就労も含めた将来の生活設計

中学校から高校への進路指導にも問題点が多いことは先に述べたが、高校から次の進路選択をどのようにするかも大きな問題である。AS自身が進路に対する情報収集への関心が

欠如していたり、理想が高すぎる場合もある一方で、家族や教師も同様な反応を起こすことがしばしばである。それでいて、こうした進路選択をきちんとしないままで、成績だけで判断してしまうと、その後の将来的な可能性そのものに支障を及ぼす可能性もある。

実際に、自験例として、ベンゼン環の形を見ると落ち着くために、化学だけを勉強していた女性は、大学でも化学を続けて勉強していったが、その一方で、人間関係はまったく興味なく、結果的に就職しても、人間関係のつまずきでうつ状態になった事例もある。それだけに、ある教科が好きであることと、それを将来の方向性とすることはイコールの関係にはならないことを周囲がきちんと理解しておかなければならない。

#### 4. 事例

(1) 事例の概要：アスペルガー症候群の女子生徒。公立高校（全日制普通科）3年生。

(2) 家族構成：父親、母親、姉、本人の4人家族

(3) 来談の契機：中学校入学後の学校での不適状態。及び周囲のパニック

##### (4) 中学校時代の支援体制

中学1年の7月から月に一回の定期的なカウンセリング（母子と担任）を通しての特別支援を開始する。当初は初めてのASへの対応のために生じる教師のパニックへの対応が中心であった。その結果として、本人への否定的な評価ばかりが先行した2学期と比べて、教師の安定度が高くなるにつれて、本人がもつプラスの評価へと視点も変化していった。

それでも、2年では学習面でも不安も出ることが予想されたので、特殊学級（情緒障害）に在籍して、授業は通常学級（成績や優秀であり、評価も他の生徒と同じ）で過ごす中で、パニックになっても、教師とゆっくりと過ごすクールダウンが可能となり、周囲の生徒への影響も少なくなり、かえって周囲の生徒とのコミュニケーションも安定してきた。

中学3年では、安定した状態が維持できていたが、高校進学のことを考えて、対人関係の学習（スキルノートの作成）にも力を入れてもらい、教科学習だけでなく、対人関係の学習も取り入れたバランスに配慮することをお願いした。

こうした支援体制により、図1と図2に示したように、WISC-IIIの結果（▲は1年、■は3年）を見ても、情緒的な安定感だけでなく、じっくりと課題に取り組む能力も安定してきたので、家族や教師と協議して、周囲の生徒も安定している公立の進学校を目標とすることとした。

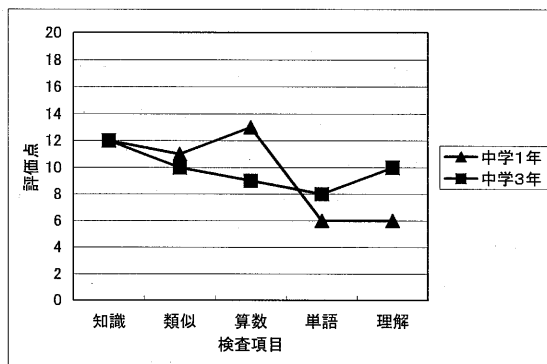


図1：中学校でのWISC-III（言語性）の変化

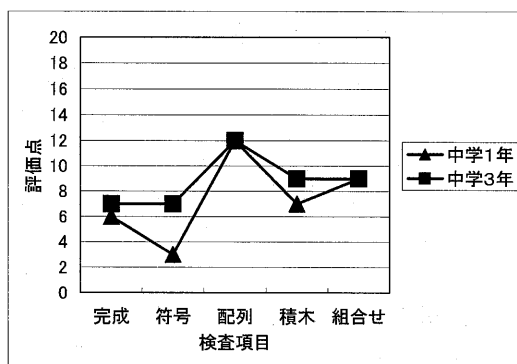


図2：中学校でのWISC-III（動作性）の変化

## (5) 高校への移行支援

こうした過程を経て、高校への移行支援を計画した。その場合、次の3点を特にポイントとした。

- 1) 進路選択：不器用さの有無。成績レベル。周囲の生徒の質
- 2) 内申書の記載：支援が必要であること。及び支援があれば伸びることを記入する。診断名を記載（家族の承認）。正直に書いてもらう
- 3) 高校との連絡：養護教諭のルートを通じての根回し。合格と同時に正式に中学校に動いてもらう。入学直前に高校と保護者での協議

## (6) 高校入学直後の高校への支援

こうした経過を経て、高校に合格した直後から丁寧な特別支援体制を動かすことが可能となった。しかしながら、中学校時代と同様に教師にとっては、毎日がびっくりする体験の連続であり、確かにこうした教師の態度は周囲の生徒にも影響した。そのために、筆者としては、高校側に次のことを特にお願いすることとした。

### 1) 担任教諭と家族との連絡帳（3年間継続）

確かに高校の教師も忙しいのは事実であるが、小学校や中学校のように気軽に学校に家族がいける状態でもないこともあり、家族が高校での姿をわかっていない状態で、家庭でフォローすることは困難である。

### 2) 演者による定期的な高校へのコンサルテーション

最低学期に一回は直接高校に出かけて、担任を含めた関係の先生達と情報交換を行うように努めた。高校の場合、課外授業等があり、先生達がそろう時間が限られるために、できるだけこちらから出向くことを心掛けている。

### 3) 高校における教師間の役割分担の明確化

今回の事例の場合、副担である女性教師が主として本人への直接的な関わりや連絡帳の記入（2年次より）を行い、男性の担任は周囲の生徒への対応を中心に行うことで役割を明確にしている。さらに、他のクラスとの調整では学年主任が、本人の悩みを聞くことを教育相談が行いながら、日々の様子については絶えず連絡を密にしてもらえるように依頼した。

### 4) 周囲の生徒への理解

高校で支援を継続する場合、この周囲の生徒への理解がもっとも難しいことがわかってきた。したがって、今回の事例においても一年生の段階で担任よりクラスの生徒に本人の状態像を詳細（アスペルガー症候群としてではなく、コミュニケーションに問題をもつ一人の女子生徒として話しをしてもらう）に話してもらい、理解を求めた。それでも、全員が理解したわけではなく、いじめやからかい等を繰り返す生徒もいることは確かである。ただし、先生達の姿勢は終始一貫性ある態度をとってもらうことで、リスクの低下は維持することができていた。

## (7) 高校入学後の本人・家族への支援

### 1) 本人・家族との定期的なカウンセリング

高校入学後も月に一度の定期的な面接は維持した。それでも平日の場合には本人は授業があるために母親あるいは両親との面接となったが、連絡帳のコピーや定期テスト（実力

テストも)の問題や解答や成績表等を持参してもらうことにより、かなり具体的に高校生活でのイメージを保ちながら面接することが可能であった。

また本人に関しては、長期休暇の場合と進路や修学旅行といった重要なイベントの際には必ず来てもらうように時間を調整することはしていた。

## 2) 家庭教師の派遣 (国語・小論文中心)

進学校の場合には、学習についていくことは通常の生徒にとっても大変な状態である。特に、ASの場合には、高校レベルでの現代国語や古典、さらに小論文が困難になることが予想される。今回の事例においても一学期の中間テストの段階で難しいことが理解できたために、研究室に所属する大学院生を家庭教師として派遣することとした。それでも、顕著な成果が出ることは難しいが、ある一定の成績は3年間維持することができたことは、他の教科の学習への意欲を高めることにも関係して、大きな効果となっている。

## 3) 現実的な進路選択の方向づけ

最近の進学校の傾向として、一年生の段階から志望する大学(あるいは、短大)の情報収集を積極的に行うようにしている。実際に、この事例でも本人が趣味としているアニメや漫画から、入学当初はこうしたアニメーション関係の大学への進学にこだわり、次々と大学案内を集める(これもこだわり)状態であった。それでも現実的に高校に適應するようになり、志望動機も現実的なレベルとなり、アニメや漫画はあくまでも趣味のレベルとして、今後の大学生活での余暇として維持することとして理解させていった。

合わせて、志望する大学については、大学においてさらに人間関係を伸ばすことを第一の目標として、福祉系に進学することに決めた。また、具体的な大学としては、筆者が把握している修学や生活面での支援を受けやすい大学を具体的に選択して、最終的には3校程度の受験とした。

## (8) 高校2年時の精神的な成長

こうした具体的な支援をスタートさせる一方で、高校入学後の本人の精神的な成長を客観的に検査した。具体的には、WAIS-IIIを実施して、言語性 IQ=109、動作性 IQ=103、全体 IQ=107 となる(図3)。

中学時よりも全体 IQ が伸びているだけでなく、言語性項目においては、中学生のときのように直感的な判断で即時に回答していたパターンから、今回の検査ではじっくりと考慮する態度が見られ、結果として「算数」の項目のように考えすぎてかえってパフォーマンスが低下する現象も見る事ができた。また、動作性項目では、やはり慎重に課題を進めていくことにより、丁寧さが増すようになり、符号や積木が上昇している現象も見る事ができた。

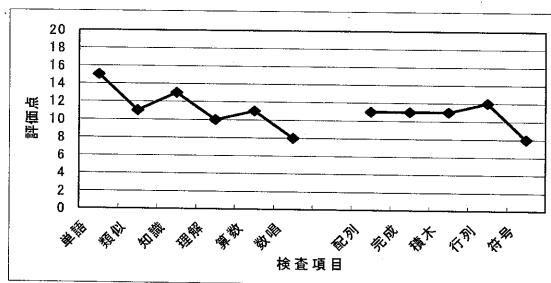


図3：高校2年時のWAIS-IIIの結果

## (9) 修学旅行への支援

高校生活も2年目を迎え、12月に修学旅行（横浜、東京の一日周遊、TDL）が行われることとなった。先生達が修学旅行について生徒達に話しをする前の段階で、大きな問題が生じた。それは、周囲の生徒が本人と一緒に修学旅行に行くことへの拒否感を先生達にぶつけ始めたことである。「本人だけでなく、私達にとっても楽しみにしている」、「学校だけでなく、修学旅行先でも本人の面倒を見るのはいや」といった反応である。それに輪をかけるように、中学校の同級生から、本人が中学の修学旅行のときに迷子になったことが周囲に伝わり、それが生徒達の不安をさらに高める結果となった。

こうした生徒の予想外の反応と前年の修学旅行で車いすの生徒さんが保護者と一緒に修学旅行を行った経験から、高校側からは「保護者についでてもらいたい」と要望が出て、ご家族も不安になり、筆者がコンサルティングに出向いた。

その結果、筆者からの提案として、東京を一日周遊するときには、ガイドボランティアとして日本自閉症協会・東京都支部・当事者部会に協力いただき、ASの当事者をボランティアとして協力してもらおう案を提案したところ、高校側も前向きになり、交渉の結果、当事者が来てくれることになった。こうした高校側の前向きの姿勢に生徒も反応して、ホテルの宿泊のメンバーも固まり、TDLは生徒同士のグループで回ることに賛成してくれるまでに至った。

## (10) 大学への進路指導

先に述べたように、入学当初から大学進学に向けて本人も家族も勉強を進めており、推薦入試等は避けて、最終的にはセンター試験を受けることを3年間の目標としておいていたこともあり、一般入試とセンター入試の形式での受験とした。推薦の場合には、どうしても小論文や面接が大きな負担となることもあり、それはできるだけ避けて、当日本人の実力が発揮できる試験方式をとることとした。

さらに、具体的な大学としては、学生生活や修学面で支援が受けやすい大学を選択して、最終的には3校程度に絞った形で受験校を決定した。

## 5. 考察

### (1) 自分から伸びたい環境への整備

今回の事例を通して改めて理解できることは、高校になったとしても環境への配慮が根本にあることである。一部の専門家達が成長したからもう大丈夫ですと無責任とも思える対応をしていることをしばしば聞くが、実際に今回の事例も、これまでの支援環境がなければ、この高校での3年間は考えられなかったことだけは確かである。

しかしながら、そこには一つのジレンマが生じてくる。それは、いつまでも支援をしていたら、本人達の自立への自覚が生まれるのかといったことである。確かに、思春期に大きく揺れる中学校までは周囲が主体となる支援を行う必要があるが、こうした確かな基盤の上に立って、高校ではそれまでの「守られた環境」から「自分から伸びたい環境」への移行することが大切であり、実際に今回の事例においても、こうした当事者の主体性をどこかでは尊重する環境作りも配慮した。それを具体的に示すとしたら、次の3点である。

### 1) 中学校からの申し送り

この申し送りで大切なことは、その当事者がもつ障害の程度や指導の困難さ（もちろん、こうした特徴も大切であるが）以上に、支援の元で3年間というスパンでどういった発達的变化が生じるかという関係者にとって見通しがつけやすい方向性を明確に示すことが重要であった。

その一環として、先に述べたように中学3年生で使用したスキルノートを高校でも使用できたこと、また、入学直後から支援体制をとったこと、そして何よりも毎日の連絡帳を通して予防的な対応やパニックが起こっても翌日まで持ち越さないようにしたことは大きな意味をもつと考えている。

### 2) 青年期のASの特徴理解

ASだとしても、思春期と高校という青年前期では、心の状態は全く異なってくる。したがって、青年期のASの特徴を正確に高校側が把握できていたことは大きい。

特に重要なことは、ASとしての基本症状は成長したから消失することはないことを最初に明確に示す必要がある。その上で、健康に成長した社会性はあくまでもそれまでの地域や学校環境で培われたものにすぎず、高校進学という大きな環境の変化があれば、それに合わせて高校生独自の新たなソーシャルスキルの形成・維持が必要であることを周知してもらう必要性が高い。

### 3) 進路選択の重要性

こうした新たなスキルの獲得は、周囲も大変だが、当事者にとってもけっして楽なものではない。したがって、具体的な目標を当事者と関係者との間で明確化して、その目標に向かって、なぜこのスキルが重要であるかを検討し続けなければならない。今回の事例においても大学進学（それに伴うセンター試験の受験）が明確にあったために、3年間維持することができたことは確かである。

しかもその際に、表に出ることはあまりないようだが、実際には最も大切な要素となると最近考え始めていることが、家族の障害受容の問題である。特に特別支援教育とともに成長する軽度発達障害が増加していることは確かであるが、そうすると中には家族自身が当事者の意向と同様に過大評価をして、高校と対立してしまう事例にも出会っている。もちろん、当事者は成長することは確かであるが、その成長と社会的自立とはけっして相関するわけではないことを忘れてはいけない。したがって、今回の事例においても家族が当事者の成長を喜びつつも、まだまだ社会的な適応レベルでは十分ではないと、現実的なレベルで障害を理解・対応することができていたことも、この3年間の支援を順調に経過させることができた要因である。その意味からも、この年代での家族の障害受容の問題は今後さらに検討されねばならない重要性をもつだろう。

## (2) 特別支援体制をとることによる高校側の波及効果

今回の事例を通して、もっともうれしいことは特別支援教育をとることを通して、高校側の認識に変化が生じてきたことである（すべての教員ではないと思われるが）。具体的には、次の4点である。

### 1) 県内の高校からの視察、特別支援関連の研修講師への教師派遣の増加

以上述べてきた高校での支援の方向性は、まだまだ支援体制が十分でない公立高校にとっては、先駆的な体制であり、同時にこうした支援を視察希望する高校の増加は、この生



徒が在籍する公立高校にとってもこれまでの対応や教師が考えていた方向性が確かなものであったという確信を再確認できたものと考えている。

## 2) 生徒の障害理解が進む

全員とはいかないが、周囲の生徒の反応として、障害をもちながらも一生懸命に勉学に頑張っている当事者との出会いや日々の接触により、大きな影響を受けている生徒が増えたことは確かである。

## 3) 修学旅行では、ボランティアであったASの当事者と接することで、先生達のアスペルガー症候群への認識が変化する

ASのさまざまなタイプに接することができない学校にとっては、どうしても、自分の限られた体験を通してのAS理解になりがちであり、他のタイプへの応用が難しい場合がある。こうしたことを防ぐ意味からも、今回の試みは意味があったものと考えている。

## 4) 問題行動への対応よりも、予防的な対応の重要性が認識される

連絡帳を初めとして、周囲からはそこまでしなくてもという意見もあったが、こうした予防的な対応をとることにより、問題の再発だけでなく、校内のさまざまな先生達でも対応でき、しかもそれで早期に問題が解決することが可能となる。こうした教師側の成功体験は特に特別支援体制を取り始める初期の段階では非常に重要となる。

以上のように、高校における特別支援教育の実践には、高校自体にも何らかのメリット(社会的・教育的)が存在することにより、こうした支援がさらに前向きに検討されることは確かであり、こうした側面を理解しながら、専門家も高校での可能性をさらに検討することが肝要ではないだろうか。

### (3) 高校における自己意識の変化

そして、こうした様々な配慮のもとで、最終的には当事者が大きく成長できたことは、関係者一同が認めることである。特に、最初に述べたように青年期の自己意識の問題とも関連させたい。

#### 1) 現実的な自己評価

成績の安定とセンター試験を受ける実力がついたことを通して、自己肯定感が安定して、本人自身が成績の評価を適切に判断して、入学当初のアニメ関係への強い希望から現実的な進路選択への変更という現実的な自己評価が可能となる。

#### 2) 他者からの評価(客観性)の受容

教師と一部の生徒からの安定した対人関係の維持が計られ、多少のパニックはあっても、自分が必要とする状況に応じて、ヘルプサインを求める適切な対象を選択できるように変化している。

#### 3) 自我同一性

修学旅行での体験を通して、モデルとなるASとの出会いにより将来への展望ができる。しかも、ASをまだまだ発達可能性があるという肯定的な形で自分の将来を再検討する契機となっている。

#### 4) 就労も含めた将来の生活設計

先に述べたように、大学は、「自分を見つけること」を目標とした進路選択をとり、生活面での自立と対人関係の成長を大きな目的として、現実的な選択ができています。しかも、筆者が必要に応じて大学での支援が可能ないように、理解ある臨床心理士や相談センターが

ある大学から進路選択をすることに対しても、進んで賛同してくれている。

#### (4) 総合考察

高校における特別支援教育の重要性は、実は次の2つの問題からも今後注目されるものと期待している。第一は、中途退学者の増加である。従来の高校における中途退学者への対応は全くなされていない現状だと認識している。それは、あくまでも本人及び家族の問題に帰されていたからである。しかしながら、実際にはその中かなりの割合で特別支援教育の対象とされるべき生徒が含まれていることは確かである。今後は、少子化の問題とも相まって、多くの退学者を出せば、それだけ直接的にも間接的にも高校経営に響く時代を迎えることを考えると、これからは特別支援教育を通しての中途退学者を減少される重要な視点となるはずである。

第二に、大学や大学院での軽度発達障害児者の増加である。大学での特別支援教育の重要性は福田(1996)の報告にあるように、学生相談関係者では大きな問題となっている。しかしながら、未診断であったり、高校までに十分な支援を受けていないために、生活面そのものが自立しない状態であったり、周囲との人間関係がとれない状態であったりするため、結果的には単位がとれない状態で相談に来るが、その背景には軽度発達障害ならでの大きな問題が潜んでいることは事実である。木谷(2007)で報告したように、20歳前後に急激に生じる自我同一性の混乱状態から考えても、大学は彼らにとってもっとも社会適応できにくい場所の代表である。それだけに、高校までの支援を受けながら、そこでの安定感があり、さらに高校から大学への移行支援がきちんとなされることで、さらに大学での社会適応が伸びることは期待されることであり、現時的にもこうした大学での支援の事例が確実に成果を出しつつあることは確かである。

このように、小学校・中学校での支援が図4に示したように、高校において当事者が本当に伸びていく基盤となるように、高校での支援体制はその後の社会生活における安定感を作る本当に大切な基礎となることを忘れてはならない。

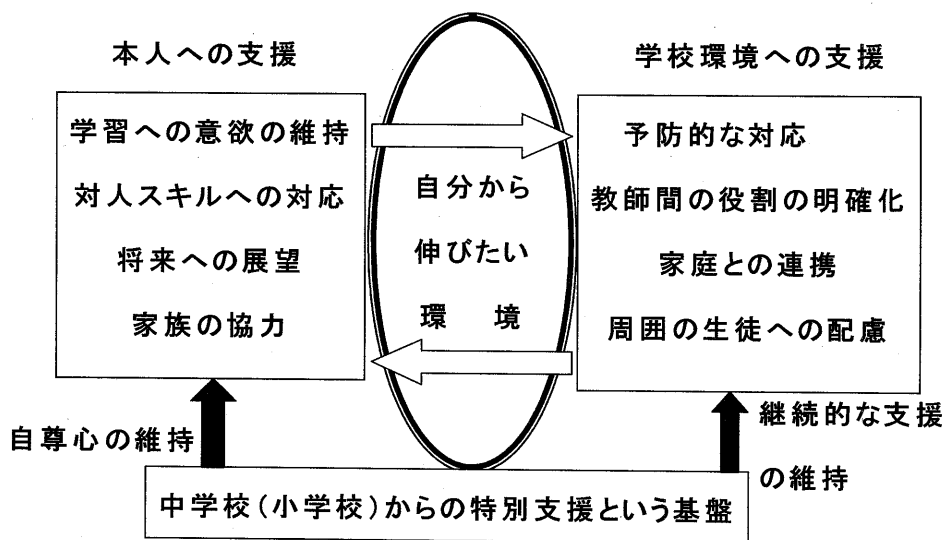


図4：高校における特別支援教育システム

## 付記

今回の報告は、第48回日本児童青年精神医学会総会（2007年、盛岡市）にて口頭発表した内容を加筆・修正したものである。また、平成17・18年度科学研究費補助金（基盤研究（C））課題番号：17530509（研究代表者：木谷秀勝）及び平成19年度科学研究費補助金（基盤研究（C））課題番号：19530625（研究代表者：木谷秀勝）の成果の一部を報告した。

## 謝辞

今回の報告にあたり、当事者とそのご家族、並びに出身中学校の先生方、高校の先生方に深くお礼申し上げます。

## 文献

- 福田真也（1996）：大学生の広汎性発達障害の疑いのある2事例 精神科治療学. No. 11, 1301-1309.
- 衣笠隆幸他（2007）：重ね着症候群とスキソイドパーソナリティ障害 —重ね着症候群の概念と診断について 精神神経学雑誌. Vol. 109, No. 1, 36-44.
- 木谷秀勝（2007）：高機能広汎性発達障害児者の自己意識に関する基礎的研究 平成17・18年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書